きびのさと
NO.95
月刊
第三輯 寺院篇 第十九号
昭和四十一年五月一日 発行（非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一二五 字垣方 呼電四三七番
吉備 観光協会

○ 清水山慈徳寺（その二）

雑波康右衛門家の墓標（極川領主戸川氏の家臣）

一、大玄商白信士　宝暦七丁丑七月十五日　俗名　雑波傳左衛門
高岸複商信女　安永八己亥七月十四日　雑波傳左衛門妻

一、瑞運良筭居士　元文五庚申歳八月十三日　俗名　雑波作大夫
秋男忠林居士　宝暦十三癸未八月廿三日　俗名　雑波吉郎兵衛
一、筭男玄性信士　宝暦九己卯九月三日　雑波仙右衛門墓
円宗智覚信女　寛政元己酉六月廿三日　（仙右エ門の妻）
一、瑠宝妙玗大姉　明和六己丑十二月二日　雑波吉郎兵衛妻
天倫忠信信士　明和三丙戌霜月廿三日　俗名　雑波彦右衛門
黄林知秋信士　文化丁卯七月初二日（四年）　雑波五郎兵衛
林妙業信女　天明四甲辰三月三日　同人妻
本室妙還大姉
一、紹光院心覚慧隆居士　文化十四丁丑歳四月七日
寿光院天真妙性大姉　天保十三壬寅年九月十五日
氏雑波名精字純一又名政則俗稱康右エ門初仕藩而為郡佐矢先娶於平山邑而不氏女後娶
於岡府小野氏女長男政枝別而為里正俗稱始治二男直助次三男出為叔氏号敬道住当山四
女阿仲嫁於岡田家臣伊氏五男政阜俗稱九十九嗣家而仕藩六男信好出為宮田氏上後治親
来治後仕藩矣因暑誌墓之図面云
一、達三幼夏信士　文政三庚辰四月七日　雑波三次郎正義
江山梁西信士　文政八乙酉八月十六日　雑波勇左エ門正行墓
節心妙貞信女
温知院宣純居士　明治十年丁丑二月八日　雑波純一郎　夫婦墓
桂嶌院宗香大姉　嘉永五壬子年七月九日。華岳浄真大姉　明治九年丙子正月廿三日　雑波
妙和大姉（不明）
一、樗月院玄諫居士　明治廿丁亥年十月初二日　雑波諫二墳十八才（雑波六十九の養子）
瑞雲院義祥宗範居士　（一年号なし）
拈蕊院寂空全点大姉　明治三十年十二月十三日　トメ　雑波亀太郎夫婦墓
珠光院宗純全鼎居士　明治三十一年陰式八月二十六日　雑波九十九政純（六十九方）
光祖代々聖霊墳　明治廿年九月二日　雑波九十九寄附本村字城の内畑地三畝九
歩也
一、円徳院心源大雄居士　明治三十三年庚子四月五月廿五日　雑波一郎墓
一、全操院真質貞意大姉　明治四十三年十一月四日　敬道和尚妹伴なか墓

△ 雑波康右エ門碧系

雑波康右衛門
天保十三年九月十五日死
名は精字は純一又政則、
戸川氏の家臣
先妻吉備郡平山村（高松町）赤木氏の女某、文化十四年四月七日死
后妻岡山の小野氏の女某
文久二年二月廿二日死

政枝　始治、里正、子孫は長野県に移るという。
直助　早世
敬道　姓は貝充、慈徳寺住職、明治廿一年二月廿二日七十七才死　養嗣養良道　広島県沼隅郡鞆町沢村武兵衛の長男、明治四年六月十八日生　同四十一年九月廿八日死亡
純一郎（別項参照）
政阜、政純、九十九、雑波家を嗣ぐ、戸川達敏に仕へ奉還金六十九両拝領（別項参照）
信好、来治、戸川氏家臣宮田信貞の養嗣（別項参照）
某女　頼山陽の子某に嫁ぎ後離別、上道郡角山村赤松氏某に再嫁す
某女　津山藩柄平氏の家臣山田文八に嫁ぐ
阿仲　岡田藩主伊東氏の家臣伊某に嫁ぐ、明治四十三年十一月四日死亡

△ 雑波純一郎系（康右エ門政則の四男であるが、政則の墓碑銘に記してない。いかなる理由で漏らしたものか明かでない）。

（雑波家の旧屋敷は下撫川下東の、いま忻司利男の屋敷になって、当時の姿はないが、ただ鎮守として祭られている出雲様という一小祠がある）。

次号につづき

純一郎　中振川大庄屋　雑波兵衛右エ門の四男
明治十年二月八日死
妻　三千　右島県沼隅郡高須村
麻生傳七郎の長女
文政九年五月十日生明
治廿九年六月十一日
上道郡角山村に死す
八十一才

多計　備後国島郡甲浦村医師北村能三郎（綱青）に嫁ぐ弘化四年十月十五日生明治廿九年十月十一日岡山天瀬にて死す六十才。

捨太郎　嘉永四年十二月十六日大阪に移る

亀治郎　墓碑に亀太郎とあり
安政二年五月十日生昭和十年某月八十一才にて香川県高松市丸町に移り死す

静枝　明治廿六年十月四日生同廿一年三月十日五才大阪に死す

安　養女　大阪の水野重太郎の妹しまの私生子明治廿六年十二月十五日生同廿一年一月十八日死四才。

一郎　明治廿一年九月廿一日生元陸軍少佐　在東京、妻は吉備郡日美村日羽大日藤右エ門の娘　某

喜代　明治廿四年十一月五日生同廿五年二月十八日死香川県香川郡宮脇村にて。

君　明治廿七年五月廿一日生アメリカに渡り死不詳。（以上三人とも母はトメ）

亀治郎　先妻トメ　熊本県能田郡花園村士族堤　渡の二女
慶應元年九月廿五日生明治廿年十二月十三日香川県寒川郡長尾村に
又三十三才死。

后妻　比佐　庭瀬手野太田熊治郎の四女　慶應二年六月十二日生昭和廿二年十月
一日死九十二才。法名浄心院妙蓮日照信女（不受不施派）

阿佐　萬延元年十一月七日生邑久郡角山村赤松大三郎に嫁ぐ、死不詳

多紀　慶應元年十月廿七日生　死不詳

△

雑波九十九系

つくも
九十九　康右エ門の五男
政純、政阜ともあり
天保三年七月六日生
明治廿一年八月廿六日死
六十七才

謙二　実は下振川高田雑波八藤太の三男、明治三年四月十三日生同廿年十月二日死十八才。
嘉永六年二月五日生、初め伯父の慈徳寺住職貝光敬道の養子となり後ち京都府宮川筋大井令普の養子となる。

租瑛　喜代蔵　芳津と改む、実は備后国沼隅郡鞆町沢村武兵衛の三男、後ち吉備郡生石村小山某に轉籍す。明治十一年六月十七日生、死不詳。

○

雑波八藤太系の墓碑（第七輯人物篇雑波譲太郎参照）

一、本源宗性信士　正徳三癸巳歳閏五月初七日　雑波多兵衛父
大円妙彭信女　元文五庚申歳閏七月晦日　雑波多兵衛母

一、湖月妙円大姉　明和三丙戌歳九月初九日
清空宗源居士　宝暦四甲戌歳八月廿七日　雑波多兵衛重方

一、春江宗沢居士　明和四丁亥三月初二日
陽甫妙春信女　宝暦五乙亥歳正月廿日　佐名　雑波多兵衛重方妻

一、実翁了義居士　文化五年戊辰八月五日　佐名　雑波兵右衛門経長
実相妙義大姉　文化三年丙寅八月十八日　雑波兵右衛門　妻　大島村（倉敷市）杖岡姓

一、御融宗普居士　文政十一戊子十月十三日　雑波藤大夫経房
末七月十一日　雑波九平太経信妻。一、白
日行年七十有九歳、雑波徳四郎源経信后妻　佐名登宛産者作州真島郡上市瀬邑妹尾兵太
郎娘也。

一、明心順晴居士　天保八丁酉年九月十九日歳。寛徳貞順大姉　安政三丙辰年十月六日歳
雑波八藤経興建。

一、節操妙心大姉　雑波八藤経徳妻　佐名為満簗岡田臣熊谷瑣珉娘也　安政四丁巳歳二月十二日歳行年
経徳妻　佐名　三十有三生一男四女　男経憲嗣家也
三十有四

一、貞彰院宗忠居士　佐名雑波八藤太経徳父八歳経興長子也明治五年三月十一日歳行年五
十有四　後妻　佐名　賀寿　窪屋郡浜村（倉敷市）阿曽沼音九郎長女也明治十
九年三月十三日歳行年五十四。

一、真操妙意大姉　明治八乙亥　五月廿三日　雑波経徳夫婦墓（二代目）

一、義照院忠道居士　雑波譲太郎。。。。。
真照院明寿大姉　雑波譲太郎墳
良智院謙道宣譲居士　雑波譲太郎経憲父八藤太経徳也長子也明治十九年八月十五日歳
芳智院憲室宣章大姉　行年三十三才妻千恵岡山市大供小山伊久蔵也二女也昭和十四年八月廿四日歳行年八十歳。

一、諦照院廓然自性居士　明治三十二年二月十六日　難波斐太郎夫婦墓
　　嶺照院梅屋智香大姉

一、松寿院春山明海居士　昭和十六年十二月十六日　歿行年六十三才
　　柏寿院南山夏妙大姉　倉敷市大島岡野多平治次男難波寿二　経徳（三代目）

（文久二年刊行の備中村鑑に「第十一輯雑集篇参照」戸川方之助「達敏」御陣屋、桙川の項に都宇郡「都窪郡」上桙川「納所、小西」　千九百三十三石一斗三升一合　大庄屋　難波紘一郎、い分　難波八藤太とあり。また賀陽郡「吉備郡後ちに都窪郡となる」三田村「庄瀬郷」前あたり」九十五石六斗三升八合九勺　難波八藤太）とある。

△難波家の始祖について

難波家は姓氏録によれば、往古高麗族にして、好太王の後裔の難波連（なにわむらじ）から出たこの梅である。中壇田使首（たづかいのおびと）経遠難波次郎兄弟が備前吉備津宮に奉仕した社人の流れである。経遠は六人兄弟の二子にして、兄を藤家朝臣隆盛といい、初め高倉院に仕へて大内舎人（とねり）であったが、治承二年八月中旬、吉備津宮の神主補佐となった。よつて大藤内ともいう。寿永二年閏十月、源平合戦に平軍の部将妹尾太郎兼康に従い、木曽左馬助義仲と篠瀬の砦に戦つて敗れ、逃れて後ち建久四年五月廿四日駿河国富士野に終るという。年四十余歳。

（当時吉備津宮は平家の庇護を受けていたので、平家に忠勤を尽していたが、滅亡後神領は悉く没収され若干の新知を受けたので、大藤内は宮の代表として鎌倉に至り失地回復の許訴を起し数年間滞在して交渉にあたつた。これは平家の支配下にあり忠勤しなくてはならない事情はやむおえないものであつた。この時土藤祐経の尽力によつて、ついに勝訴となり、その側近となつた。偶建久四年の春、源頼朝が富士の裾野で牧狩りを催した時、土藤祐経に従い、仮屋に宿営中、曽我兄弟の仇討で、主君と共に最期を

とげたのである。）経遠も兄と共に平家に属し、人物篇で記述した如く藤家大納言成親が流謫の時追立役を勤めた人で、後ち一の谷の城に立籠つた豪士という。其他諸説あつて終る所は詳かでない。この経遠から数代後ちの田使光重、難波藤右衛門というものが桙川郷に住した。その女、峯は吉備津宮の社家浅野家へ嫁いでいる。「吉備津宮記」によれば

「浅野常治（隆常の二男）浅野八郎左エ門　正保三丙戌年生る　寛文年中分家し、天和二壬辰年二月五日歿　年三十七。妻　田使氏　難波　峯、備中国都宇郡桙河郷難波藤右衛門　田使光重の女、慶安四年辛卯生る、寛文年中来嫁、享保三戊寅年六月十九日歿　年六十八」。とある。

吉備の中山、備前、備中の堺にいま慶寺になつているが高麗寺という古寺があつた。ここが難波郷の浦居の跡である。この寺の創建は高麗族の難波氏が祖先の菩提を弔うために建てたであろうことは想像にかたくない。

△石黒家の墓標（桙川戸川氏の家臣）

一、江妙円大姉　明和四丁亥歳三月八日　石黒藤太　妻
一、弘源院可耀道也居士　明和九壬辰歳三月初四日俗名石黒伴右衛門墓
一、豊慎院盛光妙源大姉　天明五乙巳歳八月廿九日寂石黒伴右衛門正屋娘日向野房右エ門武雅妻墓
一、彩雲院霊岩妙光大姉　寛政十二庚申十月廿六日石黒矢学妻墓
一、弦聲院良道矢学居士　文化五戊辰三月十七日石黒矢学源安定墓
一、精進院義峯宗卓居士　明治五壬申歳五月廿七日　石黒清之進
　　清操院卓室妙然大姉　明治廿八年四十二月廿二日妻ヤス行年六十六才　夫婦墓

△石黒家墨原

石黒伴右エ門――矢学　安定――矢学――其　早苗

（奉還金石拾弐両二分拝領）

利平　実は都宇郡箕島村畑の次男、明治十四年六月十日入籍したが同十五年十一月廿三日故あって離婚す

喜和　慶應三年五月十日生岡山市柳屋町永田治作の妻

津弥　萬延元年九月廿日生同家臣丸川專吉に嫁ぐ

女　備前一宮明神稲宣深井時宜藤原老信の后妻

清之進　実は同家臣丸川茂市の三男　天保十年七月六日生明治五年五月廿七日死　四十才

妻　屋寿　倉敷育藤儀八の長女

雄右衛門　庭瀬藩士八代家に養嗣

○荒木家の墓標（口撫川村の庄屋）

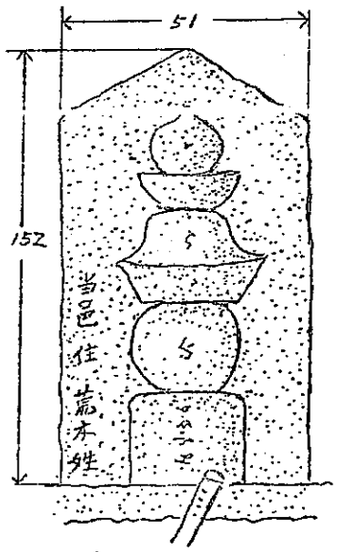
大悲医王殿の西東に高さ一五二糎、巾五一糎、厚さ二一糎の古い荒木氏の供養碑がある。表面に五輪塔婆を浮彫りし、下部の地石面に「一巻即行法子」。その左手に「当邑住　荒木姓」の文字が刻んである。年号がないので建立は判らないが、形式から推測し三百年は下らないと思われる。

供養碑には上部からなにか梵字（インドの文字）があるが摩滅してよく判らない。これはこの地の住人荒木氏祖先の建てたもので「一家こぞって五嗣の法を行ふことを願ふ」というのである。

墓地の南隅に荒木家累代の墓碑が十数基ある。

一、祖馨墓　現名　荒木六兵衛尉光吉　慶安二乙丑年十月十八日卒

一、道心　荒木弥三右衛門吉宗　慶安三庚寅正月廿一日卒



供養碑見取図

一、妙意　妻　森　小兵衛女　慶安五壬辰六月二日下世。一、妙永　墓　荒木老吉娟女　貞享三丙寅年四月十三日。一、妙桂　墓　荒木老吉妻　貞享三丙寅八月十五日卒。

一、雲輝院奇峯道夏居士　荒木六兵衛老腸　元禄十六癸未年（不明）下世。

一、妙意　墓　荒木老吉三女　正徳元辛卯年八月十五日終

一、荒木與藏之墓　正徳五乙未年十月廿五日生　元文三戊午年正月廿八日終　二十四歳

一、雲相院松嵒貞秋大姉　吉田氏女名　良　慶安四辛卯年十二月廿日生、享保九甲辰年（不明）下世（六十一歳）

一、養涼院祖翁柳仙居士　荒木十郎兵衛老重　万治二己亥十月□□生、元文二丁巳年十二月九日終七十九歳。（中撫川須佐之男神社へ石灯籠を献納した）

一、嘉雄　妻　太田氏女信　幼名清　延享二己丑二月廿一日終

一、通玄宗徹居士　荒木與次兵衛直行　寛政三辛亥年七月□□不明（小西の丈賀一郎古文書に撫川村庄屋とある）

一、繁室真昌大姉　荒木與次兵衛　養母（死亡詳）

一、中精院清芳曽源居士　荒木義平太嘉雄　宝暦六丙子歳　下世（口撫川村の庄屋）

一、藤左右衛門　妻　浜氏娘八重　宝暦十壬午辰歳十一月十三日

一、運等院持峯全勝居士　俗名　荒木藤左右衛門嘉陳　明和二乙酉年五月廿四日

（吉備津宮社家江国掃部の日記に「享保六年大洪水あり、撫川荒木藤左右エ門の屋敷へは水入りしとあり。藤左右エ門の祀の四十五年前に当る。

一、玄光院祖室妙智大姉　荒木義平太後室長右ヱ門氏娘　安永五丙申年正月四日

一、荒木六右エ門孝和　寛政二庚戌歳六月十一日

この外に数基ある。この墓碑はもと狭川の栗原仙太郎宅の西の墓地にあったが、昭和廿四年頃に下東に通ずる道路改修工事の際、いまの庶徳寺内へ移葬した。この時墓地を発掘し一つの遺骨を取り出した。この立会にいた人の話によれば遺骨は木製の座棺に納められていた。棺は一寸板位の厚さの杉材を用いて二重に囲み、その間には杉脂を溶し込み密封してあり、内部には糊穀が詰めてあった。これは遺体を包んだ布団が腐蝕して散乱したものであろう。すでに白骨になっていたが袴をつけた姿らしく、腰板が僅かに残っており、また所持品として煙草入や烟管（きせる）などが発見せられたがいづれも外気に触れて

ぼろ〳〵になつたという。遺骨は普通の体格よりも逞しく、膊から下は特別に長かつたという。また棺の外側の周囲には達筆にて長文の文字が書かれていた。これは死者の経歴を記して後世に遺したのであろうが、腐蝕し判読出来なかつたという。

墓石は三百余年前に遡る由井正雪が徳川幕府轉覆の陰謀を企てた慶安頃から寛政の頃までの約百五十年間、庭瀬藩主戸川二代正安から、撫川領主に移つた三代達恒に至る間のものであるが、寛政の六右エ門孝和以后の墓碑が見当らない。その子孫はどうなつていることか。幕末の備中村鑑にもその姓が載つておらず、没落したのでわないかと考へられる。

墓石のなかに高さ三十糎ばかり、両露にさらされて甚だしく損傷している跌座の石造の佛像がある。方形の台石の上に安置されているが墓碑と共にここに移したものである。昔からこの石佛を信仰すれば諸病に霊驗があるといわれ、俗に「どうか様」といつて崇拝した。四時供花香煙が絶えなかつたが、ここに移して賽者は全くあとを絶つてしまつた。

「どうか様」というは墓碑中にある荒木六兵衛老勝の法名雲輝院奇峯道夏居士から出た言葉である。元禄の頃、荒木家が最も全盛を極めた時代で、特にこの老勝が御民から崇敬されるような人柄であつたろうと想像せられる。古老の話によると、この荒木家の墓域を道夏様の墓地といつたという。いまその由来を知る人も少なくなり、またその跡も菜園になつてしまつた。

○荒木姓は遠祖は橘氏の出にして中興丹波国（京都府）荒木郷を拝領していたので、荒木姓を名乗つた。後世荒木大蔵大輔の時、事情があつて摂津国に流浪し、武庫郡小部庄（九一）

という在所に住した。その子孫兵衛大蔵少輔、その子孫兵衛という。子孫に美作守或は信濃守孫兵衛大蔵少輔などあり年代は詳でないが、戦国時代の乱雲に乗じて頭角をあらわし漸くその名をなした。信濃守孫兵衛大蔵少輔の三男に荒木摂津守村重というものあり故あつて元亀四年七月、備中国撫川郷にきたつて土着すという。これは中山本によるもので、その根據となる資料は備前一宮の古文書から発見したというものである。

吉備津宮（備中）の廻廊の棟札に「天正七己卯歳三月十九日荒木太郎衛門尉」とあり、また荒木肥後守孫重などの名があらわれている。この人々は村重の子孫ではないかと考えられる。（ものの本によると荒木摂津守村重は織田信長に仕え、摂津城主であつたが中国の毛利氏に内通して破れ妻子とその部下五十余人を残して備後の国へ逃走した。信長はその妻子郎党全部を捕えて尼ケ崎で磔刑したという。村重は毛利氏をたより再興を志したが、思いにまかせず将来の希望を失い、僧となつて諸国をさまよいその終る所は明らかでない。）と書いているが、前記の中山本によつて推察すると、備中は織田、毛利の勢力の接衝地であつたので、村重は備中より東へのぼることお嫌い、この撫川あたりの里に安住の地を定めて終焉したのではないかと思われる。

口碑によると庭瀬の古城（いまの撫川城址）築城以前にこの地を支配していた豪族に荒木助右エ門というものが居り、その屋敷跡はいまの福富部落の足守川並一帯から下手数ていつた足守川と妹尾用水路の間（いま中島の假橋を渡つた西詰）であつた。（おわり、未完）

「運送の御用命は　丸中運送」
御窪郡吉備町下撫川
吉備局電一七八番

有限会社取締役社長所司利男
建築業　設計　施工　所司組
吉備町・下撫川
吉備局電
29・30